

存在しない作家たちへ

神は一なる存在ではない。

どうして、私がひとつでありえようか。

フェルナンド・ペソア

存在しない小説

目次

第一回 背中から来て遠ざかる

アントニオ・バルデス

訳 仮蜜柑三吉

7

第二回 リマから八時間

フアナルド・スアレス

訳 仮蜜柑三吉

47

第三回 あたし

ラーマト・ラマナン

訳 仮蜜柑三吉

85

第四回 能楽堂まで

いとうせいこう
訳 仮蜜柑三吉

127

第五回 ゴールド

訳 キーフ・リー
ウオンキンイツブ
王健業

191

第六回 オン・ザ・ビーチ

ラルフ・アウスレンダー
訳 いとうせいこう

231

装丁 岡澤理奈

第一回 背中から来て遠ざかる

アントニオ・バルデス
訳 仮蜜柑三吉

七月初旬のよく晴れた日、フィラデルフィアからニューヨークへと走るアムトラックの列車の窓からは沿線の狂躁的な緑が見えた。それが鉄工所であれ、レンガ造りの校舎であれ、他人の家の裏庭、または所有者のわからない廃車や鉄骨の置き場であれ、まだ若く黄緑色をした広い葉や小さな葉の群れ、からまるツタが一面に見え、まるで宇宙から飛来した緑色の生命体が地球の春を生きのびて一斉に侵攻を始めているようでもあった。時おり、その繁茂をかき分けてピンク色の大きな花が顔を出し、風に揺れていた。

景色は背後から不意打ちのように右目の視界に入ってきて、すぐに全体像をあらわし、太陽の光によってくつきりと形を印象づけるとそのまま遠ざかった。窓際の席からは透명한強化ガラスの窓が鋭角的な平行四辺形の額縁に見えるから、その変形した枠の中央少し下へと光景は後退しながら左へ移動し、やがて最後尾の車両の陰に吸い寄せられては呑み込まれる。近くの景色は絶え間なく素早く飛び去るが、遠景の家々はゆっくり動くので、かえって自分と同じ方向に進むかに錯覚された。

そもそも「^{キーストーン}要石」号の各車両にひとつずつしかないボックス席を迷わず占領し、なおかつ進行方向に背を向けて座ったことに何かきわめて美術的な意味があるのではないかと、と彼ジュリー・グリエコは思いもした。午後の同じ車両には他に二人の客がいた。ひとりにはジュリー・グリエコから最も遠い端の席を選んだ妙に肌の白い太った赤髪の女で、赤ん坊に乳をやり始めてずいぶん長かった。もうひとりとは癖毛の強い若い男で、着席と同時に紺色の背広を脱いで網棚に放り投げたまま眠り込んでいた。どちらも進行方向に顔を向けていた。

そんな中、白文字で「一瞥」と書かれた黒Tシャツを大きな体に着て太めのチノパンをはき、濃い眉がなだらかに垂れていく先のエラをゆっくりと動かしては張り出した顎でガムを噛んでいるのがジュリー・グリエコで、先月二十三才になったことを人知れず悔やみ続けていた。子供の頃観ていた連続物の刑事ドラマで、一番気に入っていた頭の切れる捜査官がまさに二十三才という設定で、そのブラウン・ノートンというなんの変哲もない名前の捜査官の写真を雑誌から見つける度に切り抜いてノートに貼っては、自分が二十三才になった時には人生の頂点を一度は迎えていなければならぬし、そうなるに違いないと思っていたからだった。

それがどうだ。ジュリー・グリエコという二十三才の劇場裏方兼画廊店員はこの三ヵ月、自分という車の片側タイヤを前後二本とも側溝にはめてしまい、エンジンをふかしても泥をかき回すばかりでガソリンもどうに燃やし尽くしたようなものだった。大学を休学せざるを

得なくなつてからの数年間、ジュリー・グリエコはその側溝にはまり続けていた。そして今日、どん詰まりから抜け出るために列車に乗った。かえつて深い溝が待ち受けているのかもしれない。

目的地まで一時間半ほどある。父方の祖父エンリコ・グリエコの話から始めるのに十分だろう。ジュリー自身、車窓から外を見やりながら追憶にふけているのだから。彼エンリコは親戚を頼つて南イタリアからフィラデルフィアに移住し、主に郊外で安く買い叩いたオレソングやリンゴを特殊なオイルとポロ布で磨いて屋台に積むと、それをわずかず高く売ることとで小金を稼いだ。そして全財産をたった一夜の博打につき込んで街の南に小さな家を建て、1ブロック北に小さな果実店を開いたのだ、とジュリー・グリエコは聞いていた。果実店の名前はエンリコ&ブラザーズだったが、兄弟は誰一人アメリカにおらず、いわばその名は自分には信頼出来る仲間がいるのだというハツタリだった。

家の方はレンガ造りの三階建てで、親戚たちはその家を「博打」と呼んでいた。もう少し婉曲的な表現はなかったものだろうか、とジュリー・グリエコは同級生らより頭ひとつ大きくなつていた小学校一年生の時点で、すでに疑問に思っていた。せめて「幸運」とか「恩寵」とはいかかなかったのか。そうすれば、我が家を恥じる感覚は芽生えていなかったものを、と。

ともかく、彼はその非合法な行為の遂行を記憶し続ける家屋の中で背の低い父エミール・

グリエコと、旧姓ジェナ・ベルニという長身の母によって育てられた。むろん育てたのは父母だけではない。ジュリー・グリエコが生まれてからしばらく、胃ガンを三回切ってもなお九十才を過ぎるまで生きていたエンリコ・グリエコ、それでも一日二食は欠かさずしっかり摂り、食後のエスプレッソに砂糖とグラッパを入れて楽しんで祖父によってもオムツを替えられたし、近所に点々と住む一族郎党、つまり小麦粉とトマトと生ハムの消費量の多い男女によって、あるいはカソリック教会の厳格な教えに従うことを目指し、それぞれ見事に踏み外しては熱狂的ともいえる懺悔を繰り返す親戚一同からも強い干渉を受けながら、彼は今のような気の弱い巨漢、自分の意見を言うより先に相手の主張をよく聞いてしまうような男に育ったのだった。

個性的な周囲の者たちの中で、父エミールだけが、何年も使い古され漂白された無地のカーテンのように、特徴にもエピソードにも欠けていた。十代後半で祖父の果実店を本格的に手伝い始め、取引先の農家を新たに獲得するでもなく、特殊なオイルと布以上の画期的な用具を導入するでもなく、ただ黙々と働いて存在感を消し続け、店を継ぐことを許される四十才頃には、親戚の間で「エミール・グリエコはいない」と考えられていた。

再発見されたのは、ある冬の雪の夜、半年ほど前に自宅の台所で鼠をよけてジャンプしたアリッサ伯母の両足同時骨折が快癒した祝いの席で、旧姓ジェナ・ベルニとの婚約を本人が明かした瞬間だった。集まっていた親戚十二人は初め花柄模様の壁からなげたわ言が聞こえ

てくるのかいぶかしんだし、その声が毛玉だらけでブカブカの灰色のセーターを着たチビ男
エミールから響いていると確認するのに、まず一同の証言を突き合わせる必要があった。

「聞いたかい？」

「隣の部屋のラジオじゃないか？」

「いや、間違いない」

「あの高い声はエミールよ」

「どうか、そこにいるじゃないか」

「こいつはすっかり消えたんだと思ってたよ」

会話の間、アリッサ伯母は快癒した細い両足でソファから立ち上がると、水蒸気が見える
ほど暖かい部屋を横切つて隅の椅子まで歩き、座っているエミールの頬を張った。性的な妄
想は勝手だが、人前で話すならそれなりの会のメンバーになってからするべきで、親戚の耳
に入れるのは許されない。そもそも突然我々の間に出現しておいて、いきなり何を言い出す
のか、とアリッサ伯母は声を震わせた。

アリッサ伯母は昔から、母以上にエミールの教育にうるさかった。

するとエミール・グリエコはかつてないほどきっぱりと、「今、彼女を紹介します」と言
い、部屋から消えた。そのまま永遠に消えるのではないかと親戚のうちの数人は思った、と
のちにジュリー・グリエコは何度も聞かされた。そうした面々の前に、エミール・グリエコ

は未来の妻を連れて現れた。この寒いのに彼女は階段のところまで待っていてくれたのだとエミール・グリエコは言ったが、本当は自分の部屋に隠れてもらっていたのだろう。

町で二番目の美人と評判の白い花びらのような女性は（一番の美人の誉れ高いパトリシア・コデツァはその冬、数週間行方不明になったのち、郊外のガラス工場の裏で変わり果てた姿を発見されていたから、ジェナは実質トップと言えた）、当の婚約者エミール・グリエコを含む全員の視線を浴びて優雅に初々しく挨拶をしてから、高い背をさらに伸ばして左手を上げ、甲を前に向けた。リング形をした小さなルビーが光る金色の指輪を、旧姓ジェナ・ベルニは薬指にはめて涙ぐんでいた。

長い質問攻めの時間が始まった。おかげで明かされたことのひとつが旧姓ジェナ・ベルニが四月三日生まれで、それはなんと祖父エンリコ・グリエコがかつて大金を得た記念すべき日なのであった。これは運命だ、ふたつめの勝利が我が家に訪れたのだ、とエンリコ・グリエコは長広舌をふるい、親戚一同がそれに聞き惚れる中、当時はまだ生きていた（三年後の一九九二年、二階の窓辺で野鳥にエサをやるうち、転落死してしまう）祖母エルダ・グリエコだけが群れから抜け出て旧姓ジェナ・ベルニに近づき、七月の誕生石をリングの形で指輪にあしらったのはあなたのアイデアか？ と相手の紅潮した耳元に唇を寄せた。

旧姓ジェナ・ベルニは、本当はそうであったにもかかわらず、そよ風に揺れる青草のように軽やかに首を横に振り、パージュ色のマニキュアを見事に美しく塗った人さし指で、エミ